熱傷瘢痕後皮膚悪性腫瘍

熱傷瘢痕後の皮膚悪性腫瘍の2例

齋藤 和哉*

Two Cases of Skin Cancer Arising On the Burn Scar

Kazuya SAITOH *

* Department of Dermatology, Sapporo Social Security Hospital

The author report two cases arising of skin cancer on the burn scar. A 72-year-old Japanese woman got burnt in the frontal scalp, when she was 3 years old. The tumor was an easily bleeding nodule measuring $14 \times 14 \times 8$ mm in size. Histological examination revealed a keratotic Basal Cell Carcinoma. Wide excision of the lesion and local skin flap were performed. Second case was an 86-year-old woman who had a burn on the left thigh during a neonatal period. It has grown up to the intractable ulceration in 1995 and it became hemorrhagic. The biopsy specimen showed that the ulcer is a squamous cell carcinoma. It was removed widely under the general anesthesia, and the skin graft was carried out in 1999. [*Skin Cancer (Japan)* 2001 ; 16 : 233-236]

Key words : Burn scar, Basal cell carcinoma, Squamous cell carcinoma

はじめに

外傷、機械的刺激、紫外線、種痘、円盤状エリテマトーデスなどの皮膚疾患および様々の瘢痕が皮膚悪性腫瘍が発生母地や誘因¹⁾²⁾ となることは良く知られている。なかでも熱傷瘢痕が皮膚悪性腫瘍の発生母地となった症例は多数報告されている。今回、熱傷瘢痕を発生母地とした基底細胞癌および有棘細胞癌の2例を経験したので報告する。

症 例

症例1 : 72歳, 女性

初 診 : 1999年3月29日

主 訴 : 前頭部の腫瘍

家族歴 : 特記すべきことなし。

既往歴 : 高血圧, 脳梗塞, 脳梗塞後遺症

現病歴 : 3歳時に前頭部に熱傷受傷。1995年, 同部の腫瘍に気づき, 徐々に増大し, 易出血となったため, 初診となった。

現 症 : 前頭部に暗赤色で $14 \times 14 \times 8$ mm の易出血性の腫瘍を認め (図1), 生検施行した。

組織所見・病型 : 多数の囊腫様構造を有し, 腫瘍を構成する細胞は異型性を有する基底細胞

* 札幌厚生病院 皮膚科

様細胞で辺縁部では柵状配列を認め、臨床型基底細胞癌（以下 BCC）結節潰瘍型、組織型 BCC 嚢腫型と診断した（図 2a, b）。免疫組織化学染色で変異型 p53 蛋白は陰性であった。

治療：1999 年 5 月 12 日、局所麻酔下で脂肪層下層で切除（図 2c）、局所皮弁術施行した。術後 1 年 10 ヶ月現在、再発および転移を認めていない。

症例 2：86 歳、女性

初診：1999 年 9 月 7 日

主訴：左大腿前面の潰瘍

家族歴：特記すべきことなし。

既往歴：高血圧

現病歴：乳児期に左大腿にいろりにて熱傷受傷した。1995 年に難治性潰瘍出現に増大・易出血となったため前医より紹介となり初診となった。

図 1. 症例 1 初診時臨床

図 3. 症例 2 初診時臨床

現症：左大腿部に紅色で 20×18mm の易出血性の潰瘍を認めた（図 3）。

組織所見・病型：生検にて腫瘍細胞は好酸性で異型性を有し一部に角質真珠を認めた（図 4 a, b）。Ga シンチ、CT、MRI、血清 SCC 抗体価正常にて、有棘細胞癌（以下 SCC）高分化型、T1N0M0, Stage I と診断した。免疫組織化学染

図 2. a, b 嚢腫および柵状構造
c 病理組織全体像

図 4. a 表皮より連なる腫瘍巣
b 好酸性で異型性を有する腫瘍細胞一部に角質真珠
c 病理組織全体像

色で変異型 p53 蛋白は陰性であった。

治 療：1999 年 9 月 22 日，全身麻酔下で辺縁より 20mm 以上離して筋膜上で切除（図 4 c），植皮術施行した。術後 1 年 5 ヶ月現在，再発および転移を認めていない。

考 案

熱傷瘢痕上に発生する皮膚悪性腫瘍としては，SCC が最も多く報告されているが，稀ながら悪性線維性組織球腫³⁾や，悪性黒色腫⁴⁾ BCC⁵⁾等の報告も見られる。加藤ら⁶⁾は 1974 年以後の本邦において統計的考察がなされた 258 例の瘢痕性 SCC について集計しており，うち 230 例が熱傷瘢痕癌である。これらと筆者が検索しえた熱傷瘢痕上に生じた BCC の本邦報告例（表 1）とで比較したところ，年齢の不明な症例を除き，平均で初診時年齢は SCC で 55.3 歳，BCC で 62.2 歳，受傷時年齢は SCC で 13.1 歳，BCC で 29.7 歳，発症時年齢は SCC で 50.3 歳，BCC

で 50.3 歳，受傷時年齢の不明でない症例における発症までの平均期間は SCC で 37.2 年，BCC で 17.1 年であった。初診時年齢は BCC で 6.9 歳高く，腫瘍の成長が遅いことや色素性母斑・黒子と誤認され受診が遅れることが理由と推測された。発症年齢は両者とも約 50 歳でほぼ差はないが，受傷時から発症までの期間は BCC が 20.1 年短かく，受傷年齢が高いほど癌発生までの期間は短いとの報告と一致するものと考えられた⁷⁾。BCC の好発年齢は 60 ～ 70 歳代であるが⁸⁾，熱傷瘢痕後の BCC では 50 歳代以下が 6 例を占め，不明の 2 例を除いた 11 例で半数を超えており発症年齢の低下が認められた。男女比は SCC で 179：79，BCC で 9：4 でほぼ同率で男性が 69% を占めていた。発症部位は SCC で下肢 95 例（42.8%）で最も多く，BCC では躯幹 7 例（53.8%）で最多であった。

皮膚悪性腫瘍が熱傷瘢痕上に発生する機序として瘢痕部の真皮の線維化に慢性的に微小外傷が加わりやすい。その外傷は血行の低下してい

表 1. 本邦で報告された熱傷瘢痕上に発生した基底細胞癌

報告者・年	年齢	性	部位	受傷 年齢	発症時 年齢	受傷後発症 までの期間	受傷後 植皮	備考
上野ら(1968)	69	男	背部	不明	59	不明	-	
中内ら(1972)	52	女	頭部	1	不明	不明	-	
玉舎ら(1973)	28	男	右臀部	20	不明	不明	-	
松岡ら(1980)	56	男	左前胸	不明	56	不明	不明	
薄場ら(1985)	65	男	右下腿	45	55	10	-	
宮下ら(1985)	77	男	左腹部	60	60	17	-	
本間ら(1987)	52	女	前頭部	51	51	8ヵ月	-	
斎藤ら(1993)	74	男	左前腕	44	64	10	-	
小関ら(1994)	80	女	頭部	0	79	79	-	SCC併発
谷口ら(1996)	57	男	背部	37	56	6ヵ月	-	灸の瘢痕
山田ら(1996)	55	男	腹部	20	50	35	-	灸の瘢痕
赤坂 (1998)	72	男	背部	49	23	2	-	灸の瘢痕
自験例(2001)	72	女	頭部	3	68	65	-	

平均 男:女
62.2歳 9:4

平均 平均 平均(不明を除く)
29.7歳 50.3歳 17.1年

たるため治癒しにくいと考えられ⁹⁾，創傷治癒は実験的にはプロモーター作用を有するとの報告がある¹⁰⁾。浦野¹¹⁾らは瘢痕皮膚の真皮では組織学的に線維化，付属器の消失，脈管の減少等がみられ正常皮膚と異なっており，特にリンパ管の減少はリンパ球供給経路が低下し，腫瘍細胞に対する免疫系の監視機構が有効に作用しない可能性を示唆している。表1にあげた不明の1例を除き全例受傷後植皮術を施行されていないことより上記の機序が作用しているものではないかと考えられた。

文 献

- 1) 斎田俊明：2. 有棘細胞癌 1) 有棘細胞癌の診断と治療方針. Skin Cancer, 4: 69-72, 1994.
- 2) 小野友道：3. 基底細胞癌 1) 基底細胞癌の診断と治療方針. Skin Cancer, 4: 78-80, 1994.
- 3) 宮川昌久，福積聡，大草康弘，他：熱傷瘢痕上に発生した悪性線維性組織球腫の1例. 臨皮, 51: 275-278, 1997.
- 4) 齋藤和哉，田中智，山本美保，他：熱傷瘢痕上に発生した悪性黒色腫の1例. Skin Cancer, 7: 180-183, 1992.
- 5) 齋藤和哉，浜岡秀爾，森元洋介，他：熱傷瘢痕上に生じた基底細胞上皮腫の1例. 皮膚臨床, 35: 143-147, 1993.
- 6) 加藤直子，安川香菜，木村久美子：瘢痕癌—国立札幌病院皮膚科における7例の臨床的検討および本邦の統計的報告258例のまとめ. Skin Cancer, 14: 164-171, 1999.
- 7) Lawrence, E.A.: Carcinoma arising in the scars of thermal burns. With special reference to the influence of the age at burn on the length of the induction period. Surg. Gynecol. Obstet., 95: 579-588, 1952.
- 8) 天津朗典，前田晃，荒金兆典，他：当科における最近5年間の基底細胞上皮腫の組織分類：既報告集計例との比較. Skin Cancer, 14: 302-307, 1999.
- 9) Treves, N. and Pack, G.T.: The development of cancer in burn scars. Surg. Gynec. Obstet., 51: 749-782, 1930.
- 10) Shubik, P.: Studies on the promoting phase in the stages of carcinogenesis in mice, rats, rabbits, and guinea pigs. Cancer, Res., 10: 13-17, 1950.
- 11) 浦野芳夫，久保宜明，荒瀬誠治：熱傷瘢痕と皮膚癌. Molecular Medicine, 32: 1184-1189, 1995.